

## 歴史文化クラブ 7月研修会 古代豪族・物部氏の実像に迫る

中井 弘

7月11日(火)梅雨真っ最中に、まぶしいほどの快晴である。生駒山麓を本拠地とする物部氏の実像を探る歴史探訪に26名が参加。ただ存在感のある川井代表の欠席が残念である。

「日本書紀」や「先代旧事本紀」によると、物部氏の遠祖とされる「饒速日命」(ニギハヤヒ)が天磐船に乗り、将軍や武器を携えた兵隊、稲作・製鉄などの技術者を伴って河内国の哮ヶ峰(いかるがみね)に降臨し、原住民の豪族「長髓彦」(ナガスネヒコ)の妹、三炊屋姫を娶って河内・大和を治めていたという。そこへ神武天皇が東征するが、饒速日を「君」と仰ぐ長髓彦に生駒山で撃退される。神武は熊野に迂回して大和に入り、最後は饒速日が長髓彦を殺害して神武に帰順する。その子・宇摩志麻治(ウマシマジ)が初代天皇の即位に重要な役割を果たしたとしている。

こうした物部氏の物語は、神話から歴史の狭間にあり、そこに史実が隠されている。

「磐船神社」を訪れる。祭神はニギハヤヒ命。ご神体は命が乗ってきたとされる巨大な船形の岩石で、周囲を圧する威圧感があり、天野川がその下を潜流している。古代「磐座信仰」がみられる。

「石切劔箭神社」は神武天皇時代に創建されたと伝わり、ニギハヤヒ命とその子・ウマシマジ命(書紀では可美真手命ウマシマテ)が祀られている。古代この辺りは河内湖に面し、瀬戸内海から船でそのまま到達できた。神武が上陸した草香邑(現日下町)があり、長髓彦と戦った孔舎衛坂(くさえざか)の地名も残る。

外環状線を南下し八尾市に入る。当地は古代の河内国渋川郡で、物部守屋の館があり物部氏の本拠地であった。ここでは歴史文化クラブ会員で地元の田積彰男さんにガイドをお願いする。

真言宗「大聖勝軍寺」は「下の太子」と呼ばれる太子巡礼寺。住職から特別に地蔵堂を開扉頂き、故事来歴を伺う。587年、丁未の乱で物部守屋は蘇我馬子、聖徳太子らの諸皇子連合軍に敗れて、

この地で殺害され物部氏は滅亡した。壁画には戦いの様子が描かれている。エアコンの効いた広間で昼食させていただき、お心遣いに感謝する。

近くの「守屋の墓」は蘇我馬子の仏教導入に反対して神道を守ろうとした守屋に対し、全国の名神社が寄進したという玉垣が巡らされている。

「由義神社」へ。境内には「由義宮旧跡」(離宮)の石碑が建つ。僧・道鏡は物部系弓削氏の出身。孝謙上皇の病気回復祈禱をきっかけに、重祚した称徳天皇は道鏡を寵愛し法王にまで任じた。弓削氏一族は道鏡を足掛かりに中央政界にも進出して政治を壟断したとされる。東弓削遺跡では昨年、奈良時代後半に作られたとみられる瓦や七重塔の基壇が見つかり、幻の都といわれた由義宮(西ノ京)の实在が確認された。

「弓削神社」はJR志紀駅前にある弓削氏の氏神。手入れの行き届いた社殿は静かな佇まいである。800年頃の創建とされ、旧大和川を挟んで東西二社あり、ニギハヤヒ命とウマシマジ命を祀る。天理市へ。約1時間の車中談義。

古川さんから「物部氏の興亡」天皇家と政治の主導権をめぐる物部・大伴・蘇我の抗争について。青木さんからは黒岩重吾の歴史小説の紹介で、物部氏滅亡から123年後、奈良時代に左大臣まで上り詰めた物部(石上)麻呂について。

坂東さんから天理周辺の布留遺跡や5~6世紀の石上・豊田、杣之内古墳群などが、物部氏関連の可能性が高いと。いずれも興味深い解説であった。

「石上神宮」に至る。社伝によればご神体の「布都御魂劔(フツミタマツルギ)」は、神武が熊野で危機の時、武甕槌神が物部高倉下を通じて神武に渡したという霊劔。その後、ウマシマジにより宮中で祀られていたが、崇神7年勅命により物部・



伊香色雄が現在地に遷して「石上大神」として祀ったのが当社の創建とする。午後3時半、西大寺に帰着した。

熱中症が心配された酷暑の中、ご苦労様でした。